

## 四君子

へ鶏の八声もわきて華やかに きらめき出づる初日影 岩戸のひまの  
見えそめし 神代もかくやあきらけく 治まる御代の空長閑けく  
へ咲く梅が香も手弱女の 袂に通ふ都の春 大宮人もいとまあれや  
へ桜かざしてきさらぎや 弥生の花の白雲も いつか青葉になりぬ  
れば おのづからなる雨露の 恵みにたかく生ひいで、へ誰が脱ぎか  
けし藤袴 へ風のまにまにかをる香の 深きぞ花の みさをなる 秋  
待ちて咲く菊の花 へしたゆく水の流れ汲む 人も齡を延ぶるてふ  
その故事も名にしおふ あづまの野辺の黄金草 へ誰がみつぎのかず  
に積む それは花のしめやかなる また此君と名付けしは 霜をも  
しのぎ 雪にも折れず 雲井に茂る千代のかげ へ竹の園生の末長か  
れと へ君が千歳を祝ひける 実に佳色ある御代の春。